慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小松隆二 大正自由人物語 : 望月桂とその周辺
Sub Title	R. Komatsu, Tales of libertarians in Taisho era (Taisho jiyujin monogatari)
Author	池田, 信
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1989
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.82, No.1 (1989. 4) ,p.177- 179
JaLC DOI	10.14991/001.19890401-0177
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19890401-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」82巻1号（1989年4月）

書　評

小松隆二

『大正自由人物語
——望月桂とその周辺——』

（岩波書店，1988年）

本書は，いわゆる大正デモクラシーの時期に画家としてアナキズム社会運動に深く関わった望月桂の生涯（1887～1975年）を，同志たちとの交流，彼らのプロフィールで彩りながら丹念にたどった労作である。

アナキズム運動は，第2次大戦前の時期において日本の思想，芸術，社会運動の中に無視することのできない足跡を残している。とりわけ関東大震災のときまでは，その光芒は鮮やかであったといえるであろう。しかしながら，その評価となると毀誉褒貶著しい。権威の中に個性を埋没することを強いられてきた日本の社会において個人の自由と自由な連合とを追い求め，主体性，創造性を最大限に発揮せしめようとして闘ったことを高く評価するものがある一方，それが国家，政党，組織の中央集権的運営をいついかなる場合にも否定することを空想的と批判し，社会主義の実現にとってむしろ有害であると判断するものもある。

日本のアナキズム運動について多くの是非の論議が交わされてきたのであるが，当の運動そのものの実状については，意外と知られていない。幸徳秋水や大杉栄のような著作を多く残している著名な思想家，実践家や大逆事件のような大きな事件についてはかなり研究がなされているとはいうものの，アナキズム運動が芸術運動，労働運動，農民運動に及ぼした影響，運動を担った活動家たちの足跡についてはあまりにも知られるところが少なかった。

著者の小松隆二氏は，研究者の立場からこの空白を埋めるために長年にわたって尽力されてきた。その成果は，『企業別組合の生成』（1971年），『日本アナキズム運動史』（1972年）の著作をはじめ，数多くの論文においてすでに公にされている。その努力によってアナキズム運動，労働運動における足跡はかなり明らかになってきている。しかし，著者は，文献，資料を渉猟し，関係者からの聞き取りを重ねるなかで，その組織と運動の社会科学的解明だけではアナキズム運動の真実は究明できないと考えたに違いない。アナキズム運動の本領は，各個人がいかに権威と闘って自己を確立しつつ自由，創造，協同を，すなわち生の拡充をはかるかということにあるからである。それは一般性，連続性，体系性よりも具体性，非連続性，個別性を重視する。それはまた運動のなかで占める地位の上下によって差別することを拒否する。各人がそれぞれにどのように創造的に生きたかということこそが問題であるからである。著者のアナキズム研究は，本書のような活動家群像の叙事詩を欠いては，いかにしても完結し得なかったのである。

本書の軸に望月桂を据えたのは，著者が本人とその家族に親しく交わり，一書を構成するに足るだけの素材を得ることができたことにもよるのであろう。しかしそれよりも，望月がみずから画家としての特性を持ちつつ運動に参加し，個性豊かなアナキストたちと隔意なく付き合い，また彼らの活動を惜しみなく助けたことが，彼の生涯を軸にして彼のみならずアナキスト群像の多様性を描き出すことを可能にすると判断したからであろう。そしてその判断はきわめて適切であったと思われる。

本書は，1928年に服役中縊死した和田久太郎の遺体を引取りに秋田刑務所に近藤憲二とともに赴くところをプロローグとして始まり，望月の成長期からプロローグで扱った時点までの彼の活動と彼をめぐる人物像の叙述を本論として展開し，アナキズム運動から離れたその後の人生を簡潔に記したエピローグで終わる。

望月は，東京美術学校西洋画科で学び，後には石版画工としても修業して，西洋絵画だけでなく新聞，雑誌の表紙絵，挿絵，風刺漫画などを手掛け，さらには生活のために商業デザインにも手を拡げて行く。運動としては平民美術運動として平民美術研究会，平民美術協会，黒輝会を主宰してゆく。著者はこの運動の過程を克明に追いながら，「……その時には，この平民美術運動は社会主義運動の一翼を担うほどの運動に拡大する。多くの仲間たちを糾合する黒輝会がその最初の実りである。そこにいたる前史については，美術史にあってもこれまで空白のままであったが，後にプロレタリア美術展の先駆といわれる黒輝会と同展覧会の母体こそ，望月の平民美術研究会とそれをつぐ協会であった」(58頁) と評価している。

望月が，幸徳，大杉のような理論家としてではなく，あくまでもアナキズムを信条とする画家として美術を民衆のものとしようと尽力したことは，本書から十分に学びとれることである。しかし，読者としては彼自身の多面的な美術活動が，また彼の主宰した美術運動が日本の美術史のなかで具体的にどのように評価され，位置づけられうるのか，いま少し踏み込んで知りたいところではある。

望月は，神田猿楽町の氷水屋へちま，それにつぐ谷中の一膳飯屋へちまの主人として多くの人物と交流し，それが彼を運動に誘うこととなるが，このときからはじまるアナキストとの豊かな交流の中から著者は重要な人物を選びその人物像を明らかにしてゆく。宮崎安右衛門，久板卯之助，渡辺政太郎，百瀬二郎，中名生幸力，中浜哲，古田大次郎，古河三樹松，和田久太郎などがそれである。評者にとっては，名前だけは知っていてもあまりよく知らない人物，その名前をはじめて聞く人物が多いが，著者はこれらの知られること少ない人びとに暖かい目を注ぎつつ，求められうるあらゆる手掛かりを駆使して紹介してゆく。

著者は，この中でもとくに百瀬二郎について40頁という異例のスペースを割いて紹介している。アナキズムに接近して日本社会主義者同盟の執行委員にもなった人物であるが，その後は運動からはなれて「思索者，啓蒙家，翻訳者」(168頁) となってゆき，ダダイズムに沈潜することになる。望月との交流も一時期に限られ，彼に与えた影響も少ないと思われる百瀬にこれ程のスペースを割くほどのことはないと思われるが，家族制度のしがらみを越えて新しい村に参加した彼の妹，最期まで彼を暖かく見守った山川均・菊枝夫妻などのエピソードを含めて，著者はこの時期にアナキズム運動に参加した，現在では忘れさられている特異な思想家を，そして彼をめぐる人間関係を描きたかったのであろうと思われる。

本書において望月が参加した日本社会主義者同盟，総連合大会，平民美術運動，農民運動，救援活動，機関誌紙活動などが生き生きと描き出されている。しかし，著者がとりわけ力を注いで描いているのは，非業の死を遂げた同志たちとの係わりである。伊豆山中で凍死した久板卯之助，関東大震災直後に虐殺された大杉栄，伊藤野枝，大杉の甥，死刑を執行された古田大次郎，服役中に縊死した和田久太郎の事件との関わりと最期について，綿密な調査に基づいて旧来の論述を訂正しながら明らかにしている。本書の中でもっとも読者の心を打つ叙述である。

ここで紹介しえた内容は本書のもつ豊かな内容のほんの一部分にすぎない。本書は日本のアナキズム史研究はもとより社会運動史，美術史，思想史の，さらに広くは近代史の研究にとって欠かすことのできない貴重な貢献をなすものであるといえよう。そしてこれはすでに研究者の立場から長年にわたってアナキズム運動を研究してそのすぐれた成果を学会に問い，またその活動家に暖かい目を注いで聞き取りや資料収集などの調査に全力を注いできた著者小松隆二氏にしてはじめて可能な事業であった。

日本のアナキストについて毀誉褒貶の著しいことは先に触れたところであるが，その活動の

真相を明らかにしようとした本書の成果の上に立って，なおかつ彼らとその運動の評価が加えられなければならないであろう。

いわゆる大正デモクラシー期は維新後確立した天皇制国家の強力な権力支配のもとで地面下に潜んでいた民衆がようやく社会の舞台に登場し始めた時期であった。アナキズムはその徹底した自由と反権力，主体性と個性，協同と創造という明確なイデオロギーをもって労働者，農民や知識人などの心をとらえていった。これまで体制の諸権威の前に自らの姿を見失っていた民衆が，ようやく近代的自我を確立しようとし始めたのであった。この点でアナキズムの果たした積極的な役割が評価されなければならないであろう。さらにその積極的な意義は労働運動，農民運動，水平社運動などの社会運動の展開に一定の役割を果たしたこと，本書で示されたような個性豊かな人間像の形成に貢献したことにも示される。それは著者の示すように「大正という懐の広く深い時代，不十分ながら人間の多様性や異質性を初めて受け入れた時代」(177頁)を彩るものとなる。労働運動の指導者や活動家をとってみても，この時期の彼らがもっともステロ・タイプでない個性豊かな人間性を示している。

しかし，このような時期は長続きはしなかった。1920年代以降はふたたび抑圧体制が強化されただけでなく，社会運動の内部でも国家権力をめぐる闘争が重視され，民衆に地盤を置く政党が組織され，組織運営における中央集権性の必要が強調されるようになる。いついかなる時でも国家，政党，中央集権性を否定するアナキズムの主張は，治安維持法といわゆる普通選挙法とによる新しい統治体制の下では説得力をいちじるしく弱めることになる。組織の前にふたたび個性は埋没するということになる。そしてアナキズム運動自体もテロリズムや無法な資金調達に走るという否定的な面を強く示すことになる。

社会運動，労働組合運動の成長期にロシア革命が起こり，やがてボルシェビズムの影響力が日本に及んだことが，すなわちその成長に比してあまりにも早くボルシェビズムの洗礼を受けたことは，その後も組織の中に主体性を喪失する性向を強くもった日本の社会運動にとって大きな悲劇であったといえるであろう。

とはいえ，民衆は身体もろとも幾重もの構造的な支配の中に組み入れられている。そしてアナキズムが示したような理想的な社会の実現のためにもこの社会の諸構造・過程の相互反射的な関わりを解明し，自らを解放する組織的な方法を求めなければならない。いついかなる時でもアナキズム原則に固執するというのでは，空想的であるとの批判も，ある場合には運動の障害物となるという批判も免れることはできないであろう。

この時期のアナキズム運動の歴史的な意義とはなにか，また歴史を超えた意義とはなにか，それの持つ限界とはなにか，これらを総合的に把握できる学問的方法とはどのようなものか，著者がこれまでに築かれた大きな成果の上に立って，さらにこれらの点を解明し，教示して下さることを期待する。

池　田　　信

(関西学院大学経済学部教授)